一夕

永井荷風

青空文庫

一　小説家二、三人打寄りて四方山の話したりし時一人のいひけるはおよそ芸術を業とするものの中にて我国当世の小説家ほど気の毒なるはなし。それもなまじ西洋文学なぞうかがひて新しきを売物にせしものこそ哀れは露のひぬ間の朝顔、路ばたの槿の花にもまさりたれ。もし画家たりとせんか梅花を描きて一度名を得んには終生唯梅花をのみ描くも更に飽かるる虞なし。年老いて筆力つかるれば看るものかへつて俗を脱したりとなし声価いよいよ昂るべし。俳優には市川家十八番の如きお株といふものあり。演ずる事たびたびなれば、観客ますます喜びてために新作を顧るの暇なきに至らしむ。音曲家について見るもまた然らずや。聴衆の音曲家に望んで常に聴かんと欲する処はその人によりて既に幾回となく聴馴れしもの。即荒木古童が『残月』、今井慶松が『新曲晒し』、朝太夫が『お俊伝兵衛』、紫朝が『鈴ヶ森』の類これなり。神田伯山扇を叩けば聴客『清水の治郎長』をやれと叫び、小さん高座に上るや『睨み返し』『鍋焼うどん』を願ひますとの声頻にかかる。小説家の新作を出すや批評家なるものあつて何々先生が新作例によつて例の如しといへば読者忽ちそんなら別に読むには及ぶまじとて手にせず。画工俳優音曲の諸芸家例によつて例の如くなれば益よし。小説家例によつて例の如くなれば文運ここに尽く。小説家を以て世に立たんことまことに難し。

一　詩歌小説は創意を主とし技巧を賓とす。技芸は熟錬を主として創意を賓とす。詩歌小説の作措辞老練に過ぎて創意乏しければ軽浮となる。然れどもいまだ全く排棄すべきに非らず。演技をなすもの素に創意する処を示さんとしてその手これに伴はざれば全く取るなきに了る。翻訳劇を演ずる俳優の技芸の如き、あるひはまた公設展覧会の賞牌を獲んとする画家の新作の如き即ちこれなり。

一　角力取老後を養ふに年寄の株あり。もし四本柱に坐する事を得ばこれ終を全くするもの。一身の幸福これより大なるはなけん。小説家その筆漸く意の如くならずその作また世に迎へられざるを知るや転じて批評の筆を取り他人の作を是非してお茶を濁す。事は四本柱の監査役と相同じくしてその実は然らず。一は退いて権威いよいよ強く一は転じて全くその面目を失ふ。

一　われら折々人に問はるる事あり。先生いつまで小説をかくおつもりなるや。よく根気がつづくものなりよく種がつきぬものなりと。これお世辞なるや冷嘲なるや我知らず。およそ小説と称するものその高尚難解なると通俗平易なるとの別なく共に世態人情の観察細微を極むるものなからざるべからず。高遠なる理想を主とする著作時として全く架空の事件を綴るものあるが如しといへども、行文の中自ら作者の人間世間に対する観察の歴然として窺ふべきものあり。されば作者老いて世事に倦みただ青山白雲を友としたきやうの考起り来れば文才の有無にかかはらず、小説の述作は自ら絶ゆべし。小説の生命は俗なる所にあり。人間に接する処にあり。世事に興味を有する所にあり。西洋の文学小説に重を置けども東洋においては然らざる所以けだし尋るに難からず。

一　柳亭種彦『田舎源氏』の稿を起せしは文政の末なり。然ればその齢既に五十に達せり。為永春水が『梅暦』を作りし時の齢を考ふるにまた相似たり。彼ら江戸の戯作者いくつになつても色つぽい事にかけては引けを取らず。浮世絵師について見るに歌

麿『吉原青楼年中行事』二巻の板下絵を描きしは五十前後即ち晩年の折なり。我今彼らの芸術を品評せず唯その意気を嘉しその労を思ひその勇に感ず。

一　今の小説家筆持つ事をば労作なりと称す。推敲は苦心なり固より楽事にあらず然れども苦悶の中自らまた言外の慰楽の伴来るものなきにあらず。文事を以てあたかも蟻の物を運ぶが如き労働なりとなす所以われらの到底解する能はざる所なり。工匠の家を建つるは労働なり。然りといへども鑿鉋を手にするもの欣然としてその業を楽しみ時に覚えず清元でも口ずさむほどなればその術必ず拙からず。昔日の普請と今日の受負工事とを比較せば思半に過るものあらん。

一　黄梅の時節漸く過ぐ、正に曝書すべし。偶趙甌北の詩集を繙くに左の如き絶句あるを見たり。

売文

売文銭稍入慳嚢　〔文を売りて銭稍か慳嚢に入り
欲破休糧秘密方　糧を休ちし秘密の方を破らんと欲す
楊子江中水雖浅　楊子江中の水浅しと雖も
※他一勺亦何妨　他を一勺※むに亦た何ぞ妨げん〕

編詩

旧稿叢残手自編　〔旧稿の叢残を手自ら編み
千金敝帚護持堅　千金の敝帚を護持すること堅し
可憐売到街頭去　憐む可し売りに街頭に到り去くも
尽日無人出一銭　尽日人の一銭を出すもの無し〕

一　市川松莚君この頃『本草図譜』『草木育種』『絵本野山草』等に載する所の我邦在来の花卉を集めて庭に栽ゆ。君語つて曰く古めかしき草花は植木屋にたのみても中には間々その名をさへ忘れられしものなぞありて可笑しと。さもあるべし。向島の百花園なぞにても我国従来の秋草ばかりにては客足つかぬと見えて近頃は盛に西洋の草花を植雑へたり。日本の草花は温室咲の西洋草花に比すれば、その色淡泊その形瀟洒にて自らまた別種の趣あり。当世風の厚化粧入毛沢山の庇髪にダイヤモンドちりばめ女優好みの頬紅さしたるよりも洗髪に湯上りの薄化粧うれしく思ふ輩にはダリヤ、ベコニヤなんぞ呼ぶものよりも雪の下蛍草なぞのささやかなる花こそ夏には殊更好ましけれ。

一　つらつら四季を通じてわが国草木の花を見るに、西洋種の花に引比ぶれば、ここに自から特殊の色調あるを知る。牡丹芍薬の花極めて鮮妍なれどもその趣決してダリヤと同じからず、石榴花凌宵花宛ら猛火の炎々たるが如しといへどもそは決して赤インキの如きにはあらず。牡丹の紅は加賀友禅の古色を思はしめ、石榴花の赤きは高僧のまとへる緋の衣の色に似たり。日本の花はいかほど色濃く鮮なるも何となく古めきていひがたき渋味あり。庭後庵主人好んで小鳥を飼ふ。かつて語りけるは小鳥もいろいろ集めて見る時は日本在来のものは羽毛の色皆渋しと。まことや鶯、繍眼児、鶲、蒿雀の羽の緑なる、鳩、竹林鳥の紫なる皆何物にも譬へがたなき色なり。今や世を挙げて西洋模倣の粗悪なる毒々しき色彩衣服に書籍に家屋に器具に到処人の目を脅すにつけて、僅両三年前まではさほどにも思はざりける風土固有の温和なる色調、漸くそのなつかしさを増し行かんとす。気早の人楽にわれらを以て好古癖に捉はるるものとなす莫れ。われら真に良きものなれば何ぞ時の今古と国の東西を云々するの暇あらんや。西班牙に

固有の橙紅色あり。仏蘭西に固有の銀鼠色あり。伊太利亜に固有の紅色あり。これ旅行者の一度その国土に入るや天然と芸術との別なく漫然として然も明瞭に認むる所なり。一国の風土は天然と人為とを包合して必ずここに固有の色を作らしむ。われらは我邦土本来の面目の何たるかを知りこれを失はざらん事を慮かるに過ぎず。おのれの面目を知るはこれ即ち進んで他の面目の何たるかを窺ふの道たればなり。

大正五丙辰仲夏稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店
　1986（昭和61）年11月17日第1刷発行
　2007（平成19）年7月13日第23刷発行
底本の親本：「荷風随筆　一～五」岩波書店
　1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月
※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。
※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。
入力：門田裕志
校正：阿部哲也
2010年3月8日作成
2010年11月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一夕

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/